

北陸発!

# 草の根技術協力事業 in 中国 (ゴビ砂漠)

今、注目を集めている「社会起業家」。社会変革の担い手として、社会の課題を、事業により解決する人のことを言う（ウィキペディアフリー百科事典より）。ここ北陸にも砂漠化防止事業を通じて地球環境問題の解決に取り組んでいる方々がいます。世界の砂漠に緑と命を！を、モットーに活動を展開する「世界の砂漠を緑で包む会\*1」副会長大沢俊夫さんから「社会起業家」への道をテーマに、その設立から現在の活動にいたるまでのお話を伺いました。

## JICA) まず、緑化活動を始められたきっかけは？

**大沢さん** 留学生呉向栄君のホストファミリーを約2年間務めたことがきっかけで、彼の故郷ゴビ砂漠を訪問した時、砂漠の荒涼ぶりにびっくりしたことです。そこで、彼の父（現地知事）の要請もあったことから1997年「くずでアラ善（以後アラ善）砂漠を緑化しよう」と任意ボランティア団体を設立したのです。



現地の方々と、深い信頼関係で成り立っている（前列左が呉さん、右隣が大沢さん）

## JICA) どのような活動を行ったのですか？

**大沢さん** すぐにアラ善へくずの種を送りました。しかし、芽ができませんでした。そこですぐに播種と育苗の指導のために現地へ飛び、日本流の指導をしました。そして、日本でくずの種を採種しまして、翌年、田や畑、荒漠地、砂漠に播種しました。すると、田や畑では芽が出ました。つるも3mmくらいに伸びていました。植林ボランティアの皆さんがそれに気づいて涙を流していました。しかし、現地の冬の気温はマイナス25度くらいにまで下がり種子が凍死してしまい、翌年芽が出ず、がっかりでしたわ。

## JICA) その後、どのように活動を展開されたのですか？

**大沢さん** 「どうすればよいか」挫折することなく考え抜きました。「現地に自生する灌木の種であれば大丈夫では!？」という考えに至り即実践あるのみ。早速現地に飛びました。

しかしですね、よいことばかりではありません…。緑化への希望と期待に胸を膨らました私たち植林ボランティアを待っていた現地の方から出た言葉は「日本で木を植えるところが無くなったのでアラ善で植えるのか?」でした。自費で汗をかくボランティア活動が、当初現地の方から理解してもらえなかったことに、がっかりしました。とは言いましたが、活動自体は大成功に終わり、期待以上の成果を生み出しましたわ。

## JICA) 団体の成長期にあたり、特に取り組まれたことは？

**大沢さん** この頃は、会員の増強に取り組んでいて会う人皆に入会をお願いしていました。今思えば、このように熱心に活動すればどのような事も成就すると思うことができます。そして楽しく面白かったんですよ。

会費だけでは活動の展開に限界があります。活動資金に悩み、支援先を求め企業回りもしました。そのような時、JICA主催の支援事業の説明会がありました。この説明会への参加をきっかけに、JICA北陸との話し合いが始まりました。

そこで当会の活動目的や植林事業、くずでの緑化などをJICAに説明しました。しかし、事業の拡大に向けた具体的な話はひとつも前に進みませんでした。同時に県や環境省、外務省、郵便貯金ボランティアの説明会にも応募しましたが全てダメ。申請書類を出す段階にすら入りませんでした。

## JICA) このような状況をどのように打開されたのですか？

**大沢さん** 転機が訪れました。外務省からの支援の糸口が見出され、日本政府とアラ善政府の事業契約が結ばれたのです。するとですね、当団体に対する関係者の見る目が違ってきました。この機に1997年設立された任意ボランティア団体を2003年NPO法人として登記し、「世界の砂漠を緑で包む会」としました。

そしてその頃、JICA北陸の担当者が当会の事務所を訪れた際「JICAとの共同事業が出来ればいいですね」と言われました。この一言が私に希望を燃えさせ、事業申請の苦勞を乗り越える原動力となったのですわ。

## JICA) その時の心境は？ その後、どのように事業展開していききましたか？

**大沢さん** 全く不安はなかったです。提案事業が100%採択される確信と希望が交わり合っておりましたが、草の根技術協力事業\*2(支援型)として「中国内モンゴル自治区アラ善盟における砂漠化防止のための種子採種事業の確立と環境教育のモデル事業」(2005年10月～2007年3月)を提案しました。約1年4ヶ月かけて採択の通知を頂きました。今までの人生になかった達成感、満足感、自信に歓喜しました。その後、目的を達成することができ事業完了。

次に事業規模を拡大した「中国内モンゴル自治区アラ善盟における包括的貧困遊牧民の生活支援と地域住民の環境教育を通じた砂漠化防止事業」(2007年4月～2010年3月)がJICA草の根技術協力事業(パートナー型)として採択され、現在、事業第1年次実施中となっております。

## JICA) 今後の活動に向けて一言お願いします。

**大沢さん** 無私純粋でいちずに奮進(ばくしん)ですわ!

## JICA) ありがとうございます。



ボランティアの人々と植樹活動

### 用語解説

\*1 NPO 法人 **世界の砂漠を緑で包む会**  
活動内容は、1.砂漠緑化、2.環境教育、3.国際交流。黄砂発生源のゴビ砂漠のアラ善盟で現地の人々と一緒に灌木を植え、種子を蒔くなど草原再生を目指している。

\*2 **草の根技術協力事業(支援型・パートナー型)**  
草の根技術協力事業は、日本のNGO、大学、地方自治体、及び公益法人の団体がこれまでに培ってきた経験や技術を活かして企画した、途上国への協力活動をJICAが支援し、共同で実施する事業です。



教師海外研修 in タンザニア

# 北陸の教師がアフリカの大地で出会ったもの

JICA 北陸が教師を対象に毎年実施している海外研修の現地レポートをお届けします。

## タンザニアの厳しい現状とあふれる笑顔 「豊かかってなんだろう」

現地の小学校を訪問。そこで目の当たりにしたのは、机やイスが足りず床に座る子どもたちや、150人に対して1つのトイレという厳しい環境。しかしそこで出会ったのは、タンザニアの先生の「自分の家のようにくついでください」という温かい言葉、そして子どもたちの溢れる笑顔でした。

### 先生の感想

現在の日本では当たり前のことがここでは当たり前ではない。そのことに改めて気付いた。そして、物が豊かな日本で、幸福感が低いように感じるのとはなぜか、「豊かさとは何なのか」ということをずっと考えていた。

(石川県立金沢中央高等学校・飯澤教諭)



JAMBO! (はじめまして!)

## 日本の若い力! 青年海外協力隊 「一方的な援助ではなくともに歩む協力」

この研修ではたくさんの方々の青年海外協力隊の方々と出会いました。その中でも印象的だったのは、石川県出身の岸本紗央里さんです。彼女は村の生活レベル向上のため、村に住む人たちにいるいるなアドバイスをしています。

しかし村の生活は思うようにはよくなりません。そんな時でも、彼女はいつも笑顔で前向きに彼らと一緒に考えるのです。そんな彼女に、タンザニアの人々は「サオリ、サオリ!」といつも笑顔で声をかけていました。



岸本隊員(前列・中央)を囲んで

### 先生の感想

支援を押し付けるのではなく、人に寄り添い一緒に考え学び成長していく過程を大切にしていることがわかった。国の発展に人の育成や教育は重要な役割を担っていることを改めて実感することができた。

(金沢市立朝日小学校・新谷教諭)

## 自国の子どもたちを必死で守るタンザニアの教師 「世界共通の師の心」

私たちが最も心を打たれたタンザニア人、それは文化スクールのムブンク校長先生です。彼は自分の芸術作品を売ったお金で、無償でストリートチルドレンの生活の面倒を見ている。そして彼らに美術や芸術を教えています。先生は、「私の才能は神から授かったもの。だからそれを人のために役立てるのが私の役目」と私たちに熱く語ってくれました。

1人の生徒が言いました。「路上で生活していたときは、自分が何をしているか分からなかった。でも今は分かる。今の僕には希望がある」と。

### 先生の感想

ここで学ぶ子どもたちが、将来の夢を語ってくれた。「ここに残って先生になりたい。」という言葉に、先生という職業のすばらしさと、人間としての魅力が先生をつくるのだと再認識。

(富山県立高岡南高等学校・齊藤教諭)



日本の絵はがきを見るムブンク校長。



青年海外協力隊員は2007年6月に派遣人数が累計3万人を超えました

海外ボランティア from 北陸

## キルギスでの2年間

渡辺裕美さん

(キルギス・日本語教師・福井県出身)



古

くから遊牧生活の習慣が残り、イスラム教が広く信仰されている旧ソ連の国、キルギス共和国。そこで、私は日本語教師隊員として活動していました。国土は日本の半分、人口は約500万人と小さな国ですが、そこには日本や日本文化に関心を持ち、熱心に日本語学習に取り組んでいる人たちが大勢います。

私が派遣されていたビシケク人文大学でも日本語教育が盛んで、約200名の学生が第一外国語として日本語を学んでいました。そこで私の業務は、学生への日本語指導、各種行事運営、教師指導などで、授業時間外には、学生たちと一緒によさこいを踊ったり、日本料理を作ったり、着付けサークルを作ったりと日本紹介も行っていました。

キルギスに行った当初は、ドアのないトイレ、キルギス人ののんびりした気質、肉料理攻めやウオッカ攻撃の歓迎スタイルなど、戸惑うことも多かったのですが、いつのまにかいるいるなキルギス流にも馴染み、今では日本流に対して驚きを感じるようになってしまったくらいです。

キルギスでの2年間は、日本では当たり前のことが、当たり前でないという発見をしながら、いろいろなことと真剣に向き合った日々でした。できる限りのことを精一杯やってきましたが、自分ができたことよりも与えられたもののほうが大きかったように思えてなりません。学生の日本に対する思いや同僚教師の日本語教育に対する情熱に支えられ貴重な経験ができた2年間でした。



学生たちによさこいと日本昔話の寸劇を披露